

# 主体性を育む授業づくりが 自らを表現する素地になる

## 東京都 福生市立福生第五小学校

福生市立福生第五小学校は、子どもの主体的な学習態度に着目した校内研究を進めてきた。その過程で主体性を伸ばすには、自らを積極的に表現する活動が不可欠と実感し、そのための授業改善や指導の工夫に取り組んでいる。授業や指導の変化に伴い、子どもの表現力は高まりを見せている。

### 取り組みのねらい

- 「知りたい、わかりたい、伝えたい」という主体的な学習態度を育てる
- 引っ込み思案な子どもの発言を促し、全員が参加している実感を持てるような授業をつくる
- 答えだけではなく、理由や根拠を説明できるようにする

### 取り組みの内容

- 意識的に一定量以上、話したり書いたり表現する学習を取り入れる
- 「15の手だて」を設定し、学校全体で授業の構成を見直す
- 多様な考え方に触れられるような発問や話し合いの場面を工夫する

### 取り組みの成果

- 主体性が向上し、積極的に表現する子どもが増えた
- 「書く」ことへのハードルが低くなり、作文などの文章量が飛躍的に増えた
- 自分とは異なる考えを受け入れられるようになった

#### ● 取り組みのねらい

#### 引っ込み思案な性格を克服して 自分を表現する姿勢を育てる

東京都にある多摩川沿いの豊かな自然環境に囲まれた福生市立福生第五小学校。周囲に野鳥が多く飛来するため、開校当初から愛鳥活動を通じた情操教育や環境教育に力を入れ、2011年度には「野生生物保護功労者」の環境大臣賞を受賞した。保護者や地域社会は学校活動に協力的であり、12年には五小サポートによって教育の充実を図っている。子どもは、優しい心を持ち、教師の指示には真面目

#### S c h o o l D a t a

◎1969(昭和44)年開校。2011年度からの研究成果を踏まえ、「関わりあいを通して学びを深める言語活動の研究」をテーマに研究を深める。2013年度から3年間、東京都「言語能力向上推進事業」指定校。



校長 栗林昭彦先生

児童数 267人 学級数 13学級(うち通級指導学級3)

所在地 〒197-0004 東京都福生市南田園1-2-2

TEL 042-552-0256

URL <http://academic4.plala.or.jp/fussa-5e/>

公開研究会 東京都小学校放送教育研究会研究発表  
2013年12月10日(火) 予定

# 自ら表現したくなる授業づくり

に従うが、引っ込み思案な傾向があるという。栗林昭彦校長はこのように説明する。

「基本的な生活態度は身に付いており、学習にしっかり取り組みますが、自分の考えを表現したり、話し合ってみて考えを深めたりするのは得意ではありません。また、素直で言われた通りに出来ることは、小学校段階ではよくても、今後、社会に出ていくことを考えると、多様な価値観の中で自分の考えをしっかりと持たなければならないという思いがありました」

基本的な学習態度は出来ているのだから、自ら考え表現する主体性が育まれば、学力はより高まるのではないか……。そのような考えから、11年度に「主体的な学習態度を育てる指導の工夫」をテーマとした校内研究に取り組み始めた。

## ● 取り組みの内容

### 一定量の「走りこみ」で表現力の土台が築かれる

主体性を伸ばすために重点を置くのが、書く・話す学習を積み重ね、それまで受信型だった子どもに発信力を付けることだ。

「書く・話す・読む」を一定量しなければ、自ら表現する力は育たないと考えました。これは『走りこみ』のようなものかと思えます。走りこみが十分でないと、文部科学省の『全国学力・学習状況調査』のB問題を前にしても、読んだり書いたりする気が起きないので

はないでしょうか」（栗林校長）

同校は、授業の構成を見直し、子どもが自ら考えたことを、書いたり話したりして表現する時間を大切にしました。授業改善の過程で徐々に形作られたのが、主体性を育むためのポイントをまとめた「15の手だて」だ（図1）。これは、「学習環境」「教材提示」「特別支援教育」の3つを柱に、それぞれ5項目が整理されている。こうした手だてを用い、どのように授業を改善しているのかを見てみよう。

どの教科でも行われている手だての1つが、C-1「授業の流れの提示」だ。全ての教室の黒板にホワイトボードが張ってあり、授業の冒頭、そこに授業の流れを示す。例えば、国語では「教科書を読む」「○○の場面について考える」「意見交換をする」「まとめ」といった展開を書き込む。

「事前に流れを示し、見通しを持って学ぶ

図1 「15の手だて」		
A 学習環境	1	学習規律の確立（あいさつの仕方・聞くときの姿勢・発表の仕方など）
	2	教室環境の工夫
	3	個人で考える時間の設定
	4	学び合う活動の設定
	5	間違いを認め合う環境作り・声かけ
B 教材提示	1	五感に訴える教材の活用
	2	教材提示機器の活用
	3	具体物や実物を使った活動
	4	振れ幅をもたせるような発問
	5	学習振り返りカードの活用
C 特別支援教育	1	授業の流れの提示
	2	課題の明確な提示
	3	課題に迫る手だてのスマールステップ化
	4	短く具体的な指示
	5	学習内容の視覚化

\*同校の資料を基に編集部で作成

福生市立福生第五小学校校長  
**栗林昭彦** くりばやし・あきひこ  
「学校経営も教科指導も、常に一歩先を見て、計画的かつ丁寧に積み上げていきたい」

福生市立福生第五小学校  
研究主任。周囲への思いやりがあり、最後まで諦めずに頑張り抜く子どもを育てる。  
**拝原奈穂実** はいばら・なおみ

福生市立福生第五小学校  
5学年担任。「1日1字を学べば1年で365字。また、子どもも教師も自然体で過ごせる学校をつくる」  
**小檜山健** こびやま・けん

福生市立福生第五小学校  
4学年担任。「子どもと共に前へ」。若さを前面に出し、子どもに近い目線で共に前へ進みたい」  
**土屋俊貴** つちや・としたか

のは、特別支援教育で用いられている手法です。通常の学級でも生かせるのではないかと考えて取り入れたところ、多くの子どもが自分の中で授業の「型」を意識し、次の展開を考えて、一つひとつを消化しながら学べるようになりました」（栗林校長）

次に、B-4「振れ幅をもたせるような発問」を見てみよう。振れ幅のある質問とは、一問一答ではなく、さまざまな答え方がある質問だ。正解が1つではないため、子どもの思考や表現が広がりやすい。4学年担任の土屋俊貴先生はこのように説明する。

「考えが出て、そこで授業を止めずに、更に考えを深め、周りと共有するために『どうしてそう思ったの?』と、理由や根拠を聞いたり、他の考えを引き出したりしています」

例えば、国語の音読劇で、登場人物が近づいてくる場面を、次第に声を大きくすることで表現した子どもがいた。土屋先生が「どうして大きな声で読んだのだろうね」と質問すると、他の子どもも意味を理解し、表現を工夫することを意識するようになった。

また、A-3「個人で考える時間の設定」とA-4「学び合う活動の設定」は相互的な関係にある。

「自信を持って自分の考えを表現するためには、個人で考える時間の設定が大切です。事前に考えておくことで『安心感』が高まります」(土屋先生)

個人で考える時間は、教師が子どもの理解度などを把握する時間でもある。研究主任のはいばら 拝原奈穂実先生が言う。

「机間指導で良い表現を見つけたら、『後でこれを発表しようね』などと伝え、自信を持たせます。また、発表が正しくなくても、そこから広がる考えに着目させるなどして、間違いから気付く大切さを伝えています」

12年度の4年生の国語では、学び合う活動として話し合いに力を入れた。5学年担任の小檜山健先生が説明する。

「昨年度に担任をしていた学年は単学級の

こともあり、人間関係が固定化し、年度始めは、一部の子どもの意見に流される傾向があった話し合いが成立しませんでした。そこで、少数意見の大切さ、また賛成することだけが正しいわけではないことを伝え、5年生になってディベートが出来るように素地をつくっていきました」

初めは、発言に対して「こういう理由で賛成する(反対する)」と話させるなど、話し合いの型を示した(写真)。また、司会者は、教師が作成したひな形を読み上げて会を進行することから始めた。

「根気よく続けていると、次第に話し合いに慣れ、司会者が異なる意見を結び付けられるようになりました」(小檜山先生)

5年生になると、話し合いからディベートに移した(図2)。大きな違いは、ディベートでは、審判を設定し、「分かりやすかったか」「筋が通っていたか」などの基準で点数化し、結論を出すことだ。こうしたゲーム的な要素が加わって意見交換が活性化したほか、「自分とは異なる考えが正しいとされることもある」と実感するようになった。それにより子どもの人間関係が円滑になり、日常生活でのトラブルは目に見えて減ったという。

**気軽に詩を書かせることで  
語いを豊かにし、観察力を育む**

4年生の表現活動でもう一つ注目したいの

図2 5年生のディベートのルール



ルールと約束

- 決められた順番で、決められた時間内で発言する
- 必ず司会者に指名されてから発言する
- 他者の発言中に発言はできない
- 討論の結果は、審判の判断に従う
- 相手のマイナス点ばかりをつくのではなく、それを自分たちの正論に生かすように、作戦タイムを活用する
- 審判は、判定表に基づき公平に判定する
- 司会者ははっきりと指名して、話し合いをスムーズに進行させる

\*同校の資料を基に編集部で作成



写真 グループでの話し合いの場面。司会者は持ち回りで、全員が担当する。最初は「型」通りの話し合いが中心だったが、慣れるに従って自由に考えを表せるようになった

## 自ら表現したくなる授業づくり

が、詩を書くことだ。

年度初め、作文や読書感想文を書く、漢字の間違ひが多く、400字詰め原稿用紙の半分も埋まらず、書く力に課題を抱えていることが分かった。そこで、小檜山先生は、「家族」「担任の先生」「校長先生」「学校」などをテーマに、1年間で15本以上の詩を書かせた。表現する意欲を引き出すために、「何を書いてほしい」と伝え、書くことを楽しむことに力点を置いた。時には宿題にして、保護者には詩を書く上でのポイントを伝え、簡単なアドバイスをしてもらえるようにした。

こうした指導の結果、文章量は飛躍的に増え、3学期には少ない子どもでも原稿用紙1枚、多い子どもは3枚も書くようになった。「習った漢字は使う」ことをルールにしたため、辞書を使う頻度も増え、漢字や語いの知識も増えた。

『語い力』が豊かになっただけでなく、どのような側面からテーマについて語るかという『観察力』、更には、次は何を書くかという『好奇心』などが育ったと感じます（小檜山先生）

### ● 取り組みの成果

**具体的な改善の手だてが浸透し  
授業が変わり、子どもが変わった**

取り組みを通じ、子どもが主体的な姿勢を見せる場面が多くなったと、栗林校長は話す。

「分かりやすい展開を心掛けると共に、主体性を発揮する場面を増やしたことで、引込み思案な子どもが発言したり、それまで授業に参加していなかった子どもが前向きに学習するようになりました」

学校全体で授業改善への共通のベクトルを持つことで、教師の意識も変わった。

「どの先生も『授業を良くしたい』という思いは持っているのですが、具体的にどう変えればよいのかが分からないことがあります。特に若手の先生は、自分の少ない経験の中だけで判断してしまうこともあります。それが、学校全体で研究を進めることで、具体的な改善の手だてが示され、授業が大きく変わりました。それに伴って子どもが変わっていくという実感もありました」（栗林校長）

2年間の「走りこみ」の成果として、表現力の土台は身に付いてきた実感があり、それを基に、13年度は更に表現の質を高めるために言語活動の研究に取り組んでいる。

「より効果的な学び合いの方法を研究して授業改善を進めるほか、子どもが言葉に触れる機会を増やしたり、他学年との読み聞かせ交流や手紙交流を行ったりするなど、表現する必然性を設けていきたいと考えています」（拝原先生）

自分の考えを積極的に表現できる子どもを育てる同校の取り組みは、次なるステップに入った。

## 学校をつくり、動かすチームワーク

### 校長の役割

先生方が意欲的に研究を進められるよう、ビジョンを示し、情報を提供することが、校長の務めだと考えます。そのために、「先生一人ひとりにこのような力が付く」「授業がこのように変わる」など、研究の意義を具体的に伝えていきます。

保護者や地域社会には、学校がよく見えるように、集会やお便り、ホームページなどで多くの情報を伝えるように心掛けています。

校長 栗林昭彦先生

### ミドルリーダーの役割

校長の学校経営方針に基づき、どのような児童像を目指すのかを、常に念頭に置いて研究を進める必要があると考えています。全員が納得できる研究となるように調整することも研究主任の役割です。

職員室では、分からないことは分からないと言える雰囲気づくりに努めています。ベテラン教師が若手教師に「授業を見に来ませんか？」と提案するなど、教師同士が学び合える環境を大切にしたいと思います。

研究主任 拝原奈穂実先生